

ベネターの反出生主義における障害平等論の検討

野崎泰伸*

はじめに

デイヴィッド・ベネター (Benatar, David) は、2006年に刊行した *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence*¹において、反出生主義を提唱している。そして、その大きな反響から、反出生主義、ひいては人間が生きる意味を問う多くの議論が出てきている²。

本論文は、ベネターのこの著書ではわずか12ページ(邦訳版でも12ページ)しか展開されてはいないが、「Disability and Wrongful Life (障害とロングフル・ライフ)」と冠された箇所について検討したい。ベネターの議論に対して、この著書が刊行されてからの研究は膨大な数であるが、本論文が注目する当該箇所に特化した研究は、ごくわずかにとどまる³。

この箇所でベネターは、反出生主義と障害者の権利とは両立する、むしろ反出生主義は障害者の権利を擁護するものだという。一般的に、障害があるからという理由で、そのような人生は悪いものであると言われ、それに対して障害者の権利を擁護する側から反論がなされる。このことについてベネターは、「私の議論はその反論の内容を驚くべき、変わった方法で支持していて、そしてその反論は無効である」(Benatar 2006:114)と述べる。すなわち、ベネターは障害のある人生が悪いという主張への反論を支持するが、その反論の内容を認めることは反出生主義への反論としては無効であるというのだ。本論文では、こうしたベネ

* 立命館大学大学院人間科学研究科非常勤講師

電子メール: nozaki[a]e-ml.jp

¹ Benatar 2006。邦訳は2017年に小島和男と田村宜義によってずさわ書店より刊行された(『生まれてこないほうが良かった——存在してしまうことの害悪』)。本論文では、邦訳版を基本にしつつ、必要に応じて訳文を改変した箇所がある。

² その主なものとしては、メッツ (Metz 2014)、山口尚 (山口 2019)、森岡正博 (森岡 2020) の著作などがある。

³ わずかに、加藤秀一による秀逸な論考 (加藤 2019) があるが、加藤の論はどちらかといえば非同一性問題に関する詳細な検討となっている。また、ベネター自身は、2000年に「ロングフル・ライフの間違い」の中で、「生命の質 (quality-of-life) は、人々の間で連続的だが、どんな種類の苦痛が悪いかについては、かなりの合意がある (から、それをあいまいにはしていない)」と述べている (Benatar 2000:175-183)。さらにベネターは、ジョナサン・グローバーとステファン・ウィルキンソンの著書への書評において、障害の医学モデルと社会モデル、J.S.ミルの「危害原則」、非同一性問題、遺伝子改変、選択的中絶などの主題を扱っている (Benatar 2007:227-228, 2011:524-530)。

ターの主張を検討するとともに、障害の社会モデルや障害のある者となない者との平等について考察していく。

1 ベネターの主張

1-1 背景⁴

ベネターの主張である誕生害悪論を端的に言うならば、「存在させられることは害悪である」「人生は悪いものだ」ということである。そして、ベネター自身は、この主張の反論のひとつについて、その本質にあるのが「非同一性」に関するものである、と考える。ベネター自身はこの反論に関しては論駁できたと考え、それとは別の反論を考える。それが本論文で検討する「障害者の権利からの反論」とそれに対するベネターの応答である。「非同一性を持ち出す反論は、深刻な障害を伴った人生は悪いものだということを否定しはしない」（Benatar 2006:114）ために、ベネターは障害者の権利に基づく反論を検討しようと言うのだ。それは「非同一性問題の前提そのものを疑っている」（ibid. 114）のである。

1-2 「障害は社会によって作られたものである」ことのベネターの解釈⁵

「障害は社会によって作られたものである」という言明は、「広く誤解されている」（ibid. 115）とベネターは言う。その誤解とは、「目や耳、足の不自由は社会的に構成されてはおらず、むしろ社会とは何も関係のない一つの事実なのである」（ibid. 116）とするものだとする。ベネターは、障害の社会的構築とは、そのようなことではなく、「不能（inability）と障害（disability）とを区別すべきだということを行っている」（ibid. 116）と、正しく述べる。見えない、聞こえない、歩けないなどの不能は、ある一定の社会環境に置かれた場合、それが障害となる、このことを指して「障害は社会によって作られたものである」というのである、とベネターは述べる。「例えば、車イスが使えない建物で歩けない人は、その建物に入れないという点で障害があるとされる。けれども車イスが使える建物であれば、そのような障害は下半身不随の人にとってもまったく存在しないものとなる」（ibid.116）。すべての人間には翼がないので、鳥のように飛ぶことはできない。この意味においてすべての人間には不能なことがある。しかし、それは障害とはならない。なぜなら、翼のない人間でも建物の内部には

⁴ 「背景」については、ベネターの議論（Benatar 2006:114）を再構成した。

⁵ 「「障害は社会によって作られたものである」ことのベネターの解釈」については、ベネターの議論（Benatar 2006:115-117）を再構成した。

階段やスロープ、エレベーターなどがあって、上下の移動が可能だからである。障害者の人生を悪くしている原因は、差別的な社会環境にある。「機能的な障害 (impairment(s)) のある人が「障害がある」とされる理由は、その人に実際にできないことがあるときに、その人たちが何らかの不能を抱えているからというものではなく、むしろ社会がそのような不能を抱えた人を排除するような仕方で構成されているからなのだ」 (ibid. 116)。言い換えれば、社会によって配慮されていないからこそ、「不能」が「障害」になるのだ。

1-3 障害の社会構築論と表出主義⁶

ベネターは、「「障害は社会的に作られたものだ」という議論は、障害者の権利に関する別の議論、いわゆる「表出主義者」の議論を擁護する」 (ibid. 117) と主張する。表出主義は、障害者の存在を防止するような試みは人を不快にさせる、そのようにベネターは考えるのだ。

田村圭一によると、「倫理学における表出主義 (expressivism) とは、「道徳的な発言において、発言者は自らの態度を表出する。道徳的な言明は世界のあり様を詳述・表象・報告するものではない」という見解である。表出主義者に言わせると、たとえば、「子供の虐待は不正である」という発言において、発言者は子供の虐待に反対する態度を表出している」 (田村 2003:1)。障害者の存在だけを、障害があるという理由で防止することは、障害者の人生は始めるに値しないものだというメッセージを秘めている。したがって、表出主義者は、そうしたメッセージは発言者 (この場合、発言者は、障害者の出生を防止する社会であると考えられるだろう) の態度を表出する、と考えるだろう。そのようなメッセージによって、障害のある人の人生の価値について、偏見が残り続ける、とベネターは言うのだ。そして、障害が社会的に作られたものであるならば、障害者の人生を困難にするような障壁を取り除けばよいのであって、障害者を増やすべきではないと提案するべきではない、とベネターは言うのである (ibid. 117-118)。

1-4 障害者の権利に関する議論へのベネターの返答⁷

ベネターは、「障害は社会によって作られる」という議論の一つの強みとして、障害のない人間にもできないことがあることを強調している点を挙げる。健常者は、みずからの「不能」な側面を見ないようにしている、とベネターは言う

⁶ 「障害の社会構築論と表出主義」については、ベネターの議論 (Benatar 2006:117-118) を再構成した。

⁷ 「障害者の権利に関する議論へのベネターの返答」については、ベネターの議論 (Benatar 2006:118-122) を再構成した。

のである。このように、ベネターは健常者が自分の人生における「不能」を軽視し、QOLを不当にも高く見積もっていると考えるのである。

さらにベネターは、あらゆる「不能」によって引き起こされるQOLの低下を考えなければならないと述べる。下半身不随の障害者は、公共交通機関を利用する際に配慮を必要とするかもしれないが、飛行や超高速移動は健常者にも不可能である。「そういう能力がないということは自分たちの足を使うことができる人であっても乗り物という助けを必要としている。私たちの人生は確かに非常に何かに依存的であるという点であまりうまくいっていないのだ」(ibid. 119)。ベネターは、そのように考え、「障害が社会によって作られるとしても、一般的な人を特徴づける不能やその他の人生の不運な特徴は、十分に私たちの人生をとて悪いほうへと運んでいる」(ibid. 119)と述べるのだ。障害者が抱える障害による社会的障壁は最小限にしていくべきだとしても、それは「すべての人生に始める価値はあるのだと言うのには十分ではないだろう」とベネターは考えるのである(ibid. 119)。

障害のない人間は、障害のある人間に比べて障害者のQOLを低く見積もりがちである、とベネターは述べる(ibid. 120)。機能的な障害があることによって生じる障害が「不能」を作り出すからである。それと同じように、障害のない人間にも「不能」は存在するのだから、一切の苦痛から解放された地球外生命体が私たちを見たとき、存在していないよりも生きているほうが悪いと言うだろう、とベネターは言う(ibid. 120)。「現実にある人生はどれも考えている以上にはるかに悪いのであって、私たちの人生には始める価値のあるものなどひとつもない」(ibid. 120)。

表出主義者は、障害者の出生の防止は、障害者は存在すべきではないし、そのような人生は始める価値がないというメッセージになると考えるとベネターは述べる。ベネターはある意味において、この「障害者」の部分で「すべての人」にまで広げようとするのである。すべての人の生に始める価値がないのであれば、当然障害者の人生も始める価値がないものとなる。その意味において、ベネターは障害者の人生は始める価値がないと考えており、これは先ほどの表出主義者の主張には反対していることになる。しかしながら、ベネターは「すべての人」に生まれる価値がないと言っており、「障害者だけ」が生まれる価値がない、とは言っていない。「私たちはいいけど、君たちはだめ」というような理屈ではないため、ベネターは「障害のある人に対してあまり攻撃的ではないだろう」と述べるのだ(ibid. 120-121)。「私が主張しているのは、障害がある人の人生についてだけでなく、私自身の人生も含まれる全人類の人生についてだからだ」(ibid. 121)。

1-5 ロングフル・ライフ⁸

ベネターは、障害のない人が起こすロングフル・ライフ訴訟も検討している (ibid. 122) が、ここでは、障害者が起こす同訴訟についてのみ言及する。

ベネターは、「障害のある人は、自分をそのような状態で存在させた非難に値する行為をした人に対して、生まれたいほうがよかったと訴え出てくるのができて当然だろうか？」と問う (ibid. 122)。これが、いわゆるロングフル・ライフ訴訟の中核部分である。そして、この訴訟は、「もしある人が子どもを持つとするのなら、より悪い人生を歩む子どもよりはむしろよりよい人生を歩む子どもを持つべきだ」 (ibid. 122) という考えに基づいて行われるだろう、とベネターは言う。しかし、先ほども述べたように、障害のない人間は、障害のある人生を過剰に悪く評価しがちである。健全な裁判官や陪審員は、こうしたバイアスがあるがゆえに原告の訴えに共感するだろう、とベネターは述べるのである (ibid. 123)。幸せな障害者は不幸な健全者より QOL が高いかもしれない、とベネターは言う (ibid. 123)。

そのような修正は加えなければならないが、としたうえで、ベネターは次のように言うのである。「私たちはそのような途方もない苦痛を伴う人生を想像することができる——悪意または過失がなかったら未然に防がれるべきだったし、避けられていたであろう苦痛を。だとすれば、生まれてこないほうがよかったという訴訟は全体的に適切な訴訟である」 (ibid. 123-124)。

1-6 小括

ここまでのベネターの議論をまとめておきたい。

この本においてベネターは、本論文で議論する「障害とロングフル・ライフ」より前に、「誕生害悪説」つまり「すべての人の生は始めるに値しない」という主張を展開してきた。一般的に、生命倫理学において存在の価値や存在の是非が議論される代表的な集団は障害者である。そのうえで、障害者の権利を主張したとしても、自説は擁護できるということをベネターはこの部分で展開しようとしていると言える。障害者の権利から出発する議論は、非同一性とは別のところから出発し、非同一性問題の前提を疑う (1-1)。次に、障害者の権利の主張の根幹をなす「障害は社会によって作られる」という意味を説明する (1-2)。さらに、倫理学における表出主義がそのような障害の社会構築論をいかに解釈するかについて論じる (1-3)。加えて、ベネターは、「すべての人の生は始

⁸ 「ロングフル・ライフ」については、ベネターの議論 (Benatar 2006:122-124) を再構成した。

めるに値しない」と言っており、障害の有無によって区別しているわけではないから、この説は障害者差別ではなく、障害者の権利を擁護する立場からも展開できる、とする（1-4）。最後に、ロングフル・ライフ訴訟は、健常者の偏見があったとしても、やはり適切な訴訟である、と結論づけている（1-5）。

2 批判的解読

2-1 本論文の位置づけ

本論文は、非同一性問題と障害者に関する私の論文（野崎 2020）を進めたものである。ベネターは、「障害者の権利から出発する議論は、非同一性とは別のところから出発し、非同一性問題の前提を疑う」と考えるが、私もそれは共有するものである。「健全な肉体を規範とするような思想が論点先取されていなければ、障害に関する非同一性問題が「問題」にはならないのではないかと考えるのである」（野崎 2020:36）。私もまた、エイブリズムが非同一性問題の隠された前提とされていることを問題にしているのだ。ところが、ベネターは障害者の権利を主張していても誕生害悪説はそれには矛盾せず、よって誕生害悪説は障害者を差別するものではない、と論ずるのだ。私は、それには論理の飛躍がある、つまり、誕生害悪説は障害者の権利とは両立しないと考える。そのことを示すために、ベネターの論理を検討しながら、ベネターの議論のどこに難点があるのかについて示していくことにする。

2-2 障害の社会構築論について

障害の社会構築、すなわち「障害は社会的に作られている」という考えは、障害学（Disability Studies）においては基本的な考えのひとつである。倫理学における障害に関する議論は、往々にしてこの観点を無視あるいは軽視しがちであるが、ベネターは障害について論ずるとき、周到にもこの点に言及している。この考えを、ベネターは「不能（inability）と障害（disability）とを区別すべきだということを行っている」と正しく解釈している。ただし、障害学においては「不能」は「機能的障害」に由来している、とは考えない。そのような考えは、「不能」をあたかも障害者個人の責任に押しつける医学モデル（個人モデル）の考えが前提とされるからである（池田 2014:89）。しかしながらベネターは、「例えば、車イスが使えない建物で歩けない人は、その建物に入れないという点で障害があるとされる。けれども車イスが使える建物であれば、そのような障害は下半身不随の人にとってもまったく存在しないものとなる」（Benatar 2006:116）、

「機能的な障害 (impairment(s)) のある人が「障害がある」とされる理由は、その人に実際にできないことがあるときに、その人たちが何らかの不能を抱えているからというのではなく、むしろ社会がそのような不能を抱えた人を排除するような仕方で構成されているからなのだ」 (ibid.116) と言っている通り、「不能」は社会環境によって作られると述べている。つまり、「不能」という言葉を使ってはいるが、ベネターは障害学における社会モデル的な考え方を提示していると言ってよいように思われる。

2-3 表出主義

佐藤岳詩によると、表出主義とは、「話し手の側の何かを言い表」 (佐藤 2021:No.3993-3994) し、「道徳判断の第一の目的は真理を表すことではないと考える」 (佐藤 2021:No.3994-3995)。言い表す「何か」とは、当初は「話者の態度、感情、情動の表現」 (佐藤 2021:No.3990)、しだいに「説得、命令、助言など」 (佐藤 2021:No.3992) であると考えられるようになったという。

出生前診断に基づく中絶は、「障害者の出生は悪い」というメッセージを含む⁹。それが社会で当たり前のこととなったとき、表出主義の立場を取るならばそれは社会の側の態度を表すかもしれないし、もっと強く「障害者の出生は防止されるべきだ」という命令を意味するものかもしれない。いずれにせよ、表出主義者は、「障害者の出生は悪い」というメッセージがあるとき、障害者の出生そのもののよさや悪さを第一義的に言っているのではなく、むしろメッセージの発話者の側の何らかの意味を表出していると捉える。よって、表出主義者にとって、選択的中絶を許容する社会は、障害者に対する偏見を助長するものであるとベネターは考える。

2-4 すべての人の生を否定すれば障害者差別ではないのか

ベネターの誕生害悪論の対象はすべての人の生である。つまり、ベネターはすべての人の誕生を悪いものであると主張しているのであって、障害者の誕生のみを悪いと言っているわけではない。果たして、こうした主張を障害者差別ではないと言えるのであろうか。

男女平等を主張するなら、トイレも銭湯も男女混合にしる、という主張がある。スウェーデンのように、男女混合でサウナに入る国もあるようだが、それは

⁹ 現実問題として、障害のある子どもが生まれると経済的により多くの負担がかかるため、やむなく中絶する、ということはあるかもしれない。その場合においても、「障害者の出生は悪い」と伝わる可能性は否定できない。

女性の身体が性的に描かれないなど、いくつかの理由がある（オトナンサー編集部 2021）。こうした主張のほとんどは、男女平等を揶揄する目的で使われる¹⁰。一方で、男女平等のために男女混合名簿にするのは、理があると考えられる。すべての場合において、マジョリティとマイノリティを混合させたり、単に同じく扱ったりすることが、差別を撤廃するというわけではない。その基準や目的などによって、差別を撤廃するものかどうかは変わってくる。よって、障害の有無で区別しないから障害者差別ではない、と単純には言えないはずである。障害者の誕生も健常者の誕生も共に否定するから障害者差別ではない、とは言えないはずであり、結局、誕生を否定することそのものが問われることになる。

健常者が障害者の QOL を低く見積もる傾向があるとするベネターの指摘は正しい。これは、エイブリズムとも直結する問題である。エイブリズムとは、「人々が発揮したり価値づけたりする能力に基づいて、当該の人自身、その人の身体、他者や他の種あるいは環境に対する関係性への特定の理解を生み出すような信念、過程そして実践のことであり、他者によってどのように判断されるかをも含む」（Wolbring 2008:252-253）。そしてそれは、「ある社会集団や社会構造が、例えば生産性や競争力のような能力を評価したり助長したりする、そのような感情を反映している」（*ibid.* 253）。要するに、エイブリズムとは能力によって人間を判断するような思想であり、その過程であり、またその実践でもあり、判断することそのものでもある。障害者の「不能」によって、健常者は障害者の QOL を判断する。そうした「不能」の多くは社会によって作られているが、そのことに関して健常者は無知であるため、「不能」の原因を障害者個人に求め、その責任を障害者個人に帰着させるのである。そう考えると、QOL を測定することの中にも、エイブリズムが潜みうると考えられるのである。

健常者として「不能」があり、健常者はそのことに気づきづらいという主張もまた正しい。なぜ気づきづらいのか、それは健常者の「不能」は多くの場合それで生活が不自由になることがないからである。翼はなくとも階段があれば健常者は上階に行ける。健常者は社会によってすでに配慮されているからこそ、自身の「不能」には気づきづらいのである。このように考えると、障害のない人間が障害のある人間を眼差す視座と、「完全な」地球外生命体が障害のない人間を眼差す視座とは、同列に語ることはできない。確かに、「不能」に差がある、つまりは「不能」について非対称であるという点は同じであるが、地球外生命体は「不能」や苦痛がゼロであり、かつ地球外生命体は地球上で人間と共に生きているわけではない。この二点については決定的に違う。少しでも「不能」があるからこ

¹⁰ たとえば、ジェンダーフリーを「日本の伝統を壊すもの」として、ジェンダーフリーこそが男女混浴を進めた、とする主張がある。しかし、男女混浴こそが「日本の伝統」として存在するため、このような議論はまったくの嘘であり、単にジェンダーフリー推進派を揶揄しているに過ぎない（井上 2008）。

そ、私たちは誰かや何かの助けを借りて共に生活することができる。地球外生命体は、「不能」や苦痛がゼロであり、それはそれでよいのかもしれない。しかしながら「不能」があることによってつながっていくことはないのである。

ベネターは「健常者にも「不能」や苦痛がある」という主張を逆手に取るような形で、「障害者も健常者も、障害の有無にかかわらず、すべての人は人生を始めるに値しない」と結論づける。そして、こうした結論は「障害のある人に対してあまり攻撃的ではないだろう」と述べる（Benatar 2006:120-121）。「私が主張しているのは、障害がある人の人生についてだけでなく、私自身の人生も含まれる全人類の人生についてだからだ」（*ibid.* 121）、つまり、障害者だけではなく、健常者も、そしてベネター自身も人生を始める価値がないと考えるのである。そのことを指して、障害者の権利を擁護する、とベネターは言うのである。

この、私にはニヒリスティックであると思える主張の根幹には、ベネターには「不能」によってつながること、依存するということの強烈なまでの否定があるのではないか、そう私は考える。

そういう能力がないということは自分たちの足を使うことができる人であっても乗り物という助けを必要としている。私たちの人生は確かに非常に何かに依存的であるという点であまりうまくいっていないのだ（*ibid.* 119）。

ベネターは、「不能」もまた、人生を悪いものにする、と述べる。ここに、ベネターの人間観や社会観が現出している。「乗り物という助けを必要としている」からこそ、私たちは公共交通機関を編み出した。独力ではできないことがあるからこそ、私たちは社会的分業という形態を生み出してきたのではないか。障害がある人のほうが障害のない人より相対的により依存的であるし、「完全な」地球外生命体であれば、依存する必要はない。ベネターは、依存がより大きい障害がある人のほうが人生がうまくいっていないと考えていることになるが、そうだとするならば、もはや障害者の権利の擁護者ではない。

2-5 ロングフル・ライフ

ベネターは、障害のない人が抱きやすいバイアスとして、障害のある人の人生をより悪く評価しがちであり、幸せな障害者は不幸な健常者よりも QOL が高いかもしれない、と言う（*ibid.* 123）。その一方で、そうしたことに気づいていてもやはり、障害を「途方もない苦痛」であると表現し、「悪意または過失がなかったら未然に防がれるべきだったし、避けられていたであろう」とも述べる。そして、ベネターはロングフル・ライフ訴訟を「全体的に適切」と言う

(ibid. 123-124)。

仮に、障害が苦痛なものであったとしても、その苦痛をどうやって軽減していくか、人々が知恵を出し合う。それで苦痛が少しでも和らぐようならよいことであるし、和らがなかったとしても、そこに集い、知恵を出し合った中によるこびが生まれる。依存する／されるという中で、確かなよろこびが生まれるのだ。人生の最初、すなわち誕生がなければ苦痛もなく、苦痛がなければよいとするベネターの理屈は、こうした「苦しみをいかに共に越えていくか」という中にあるよろこびの存在を軽視している。

2-6 小括

ベネターは、誕生害悪論は障害者差別を擁護せず、むしろ障害者の権利を擁護するものである、なぜならば障害者の誕生のみを悪いと言っておらず、すべての人の誕生をすべからず悪いと言っているからだ、と考える。本章では、この論理について検討した。

ベネターは、障害者の権利を主張する根底にある考え方である障害の社会構築について、正しく解釈している(2-2)。そして、表出主義者が選択的中絶をいかに捉えるかについて論ずる(2-3)。さらに、障害者のQOLについて、障害がない人は往々にして不当に低く見積もることを指摘し、そこにエイブリズムが潜んでいるとベネターは考える。それにもかかわらず、ベネターは障害の有無によって誕生のよし悪しを分けているのではないから、誕生害悪説は障害者を差別するものではなく、むしろ障害者差別への反対を擁護するものだという(2-4)。また、ロングフル・ライフ訴訟についても「全体的に適切」だと述べる(2-5)。

これに対し本論文では、ベネターの議論の前提に、「不能」によってつながっていくことの軽視や、依存することを悪いことであると捉える人間観・社会観があるのではないかと述べた。そのような人間観や社会観こそが、人間の誕生というものをよくないものであると考えさせるのではないかと論じた(2-4)。さらに、人生が苦痛に満ちたものであるとしても、「苦痛を乗り越えるために共に生きていくよろこび」というものをベネターは軽視しているのではないかと述べた(2-5)。

次章では、こうした人間観や社会観についてさらに深く掘り下げていきたい。

3 人間の不完全性について

第2章の最後に述べたように、ベネターは「完全で依存しない人間」という人間像を想定しているからこそ、現実の人間の不完全さに由来する苦痛を取り上げ、そのことをもとに誕生害悪論を展開しているのではないか。その主張を補強するために、「不完全で依存しなければ生きていけない人間」としての障害当事者の主張を取り上げよう。

テレビ番組でも活躍する、脳性マヒ者の玉木幸則は次のように言う。

ぼくは「ちゃんと生まれてないか」と考えると、生まれてきているわけですよ。つまり、こうして生きつづけているわけですから、これこそが「ちゃんと生まれてきた」証しだと思います（玉木 2012:10）。

玉木は、先天性の脳性マヒによる障害を有する。健常者の誕生に比べると、「ちゃんと」生まれていない、とされる。しかし、ここで玉木は「ちゃんと」生まれるということの意味を考えるわけである。玉木は、「ちゃんと」生まれるということ、生き続けてきて、いまここに存在していることであると解釈する¹¹。

さらに、玉木は続ける。

それでいくと（引用者註・健常者の誕生を基準にすると）、ぼくは「ちゃんと生まれてない」ことになるのかもしれないけど、大人になった今のぼくを見て「あの人は、ちゃんと生まれてきてないな」と思う人が、どれだけいるのでしょうか。たぶんぼくの子どものときに比べると、そのように思う人は減ってきていると思います（玉木 2012:11）。

確かに、現在の玉木も、テレビ越しで見ると、体幹の姿勢が定まらず、それが理由で「ちゃんと生まれてきていない」と見る視聴者もいるかもしれない。しかし、それは玉木が子どもであった頃よりは確実に減っているはずだ、と言うのである。それは、玉木が生まれてきて、現在ここまで生き続けてきた、その歴史が物語っている、とするのである。

続いて、ダウン症の当事者である岩元綾は次のように言う。

生まれてこないほうがいい命なんてないですよ。赤ちゃんはお母さんのお腹の中で蹴ったり、たたいたりしながら、命があることを知らせてく

¹¹ これは、「出生の否定は存在の否定を導く」（野崎 2020:39）の対偶命題である「存在の肯定が出生の肯定を導く」ということなのかもしれない。

れます。その命を大切にしてほしいと思うんです。

その命を生まれる前からなくすよりも、ダウン症や障害のある人、すべての人が生きやすい社会をつくるのが先ではないかと思います（岩元 2014:38-39）。

ダウン症や障害があるとかわいそうだと感じる人もいるかもしれませんが、それは違うと思うんです。幸せのかたちは人それぞれであるんです（岩元 2014:39）。

このように、健常者よりも「不完全で依存しなければ生きていけない人間」である脳性マヒ者やダウン症者は、誕生害悪説とは正反対の主張をしている。実は、私自身が、「生まれてこなければよかった」と思っていた。大学に入って、障害者たちの世界を知り、「そのように考えなくてもよい」と思うようになったのである。だから、ベネターの誕生害悪論というのは、昔、高校時代までの私が考えていたことでもあるのだ。

さらに、千葉県社会福祉法人で働く重度障害者の西田江里は次のように述べている。

「私の「生きる意味」は、「障がいがあっても、自分らしく生きていいんだよ」ってみんなに伝えることです。

それは、私がこの30年間でわかったことです。私は、生まれてきて良かったと思うし、生きていたいって思うのです」（西田 2021:5）。

「私が生まれたのには、意味があるよね。だって、今こうやって生きてるんだから。

私は、大人になれないかもしれないって言われてママは悲しかったみたいだけど、今ここでこうやって指談をして、指を動かして、ことばを使って、伝えることができている。私にとって、こんなに幸せなことってない」（西田 2021:146）。

「ふつうに生きてる、生きられるってことだけでもいい。社会にとって、「幸せに生きてる」って言える人がいることも大事じゃないのかな？

幸せに生きることが、私の生きていく意味になるのかもしれないって思って、つらいことがあっても、私はがんばれる」（西田 2021:146-147）。

重度の障害のある西田は、生活のあらゆる場面においてケアスタッフの支援を

受けながら暮らしたり働いたりしている。独力ではできないことばかりであるから、健常者よりも小さなことで幸せを感じてしまう、という捉え方をする向きもあるだろう。もし、ベネターのように「(障害の有無は関係なく)人間の生は思うよりも悪い」のであれば、その「悪い生」を生きている中においては、障害の有無にかかわらず人というのは小さなことで幸せを感じるものではないのか。本論文で提起した本質的な問題はそこにはない。ベネターの発想と、障害を得た玉木や岩元、西田の発想とは真逆なものであり、ここにこそ、障害者たちが、〈否定される誕生〉を越えてきた苦闘の行動や思索の連綿と続く継承がある。そして、私はそのような思想を、障害者だけではなく、すべての人の誕生を否定せず、その生を肯定する思想へと延長していくことができる可能性を感じるのである。

おわりに

本論文は、反出生主義を唱えるベネターの誕生害悪論が、障害者の権利を擁護するかという点について考察した。ベネター自身は、障害者の権利を擁護すると言うのだが、検討の結果、それは間違っているということになった。障害者も健常者も「人として」その生が悪い、というところだけを取れば、障害者差別ではない、と言いたいその筋道は理解できる。しかし、それは私には「女性兵士は男女平等の象徴である」という理屈と同じように聞こえる。つまり、女性兵士の存在は戦争を肯定するものであり、真の男女平等な世界というのは「男性も女性も兵士にならなくてよい世界」なのではないのか。そして、そのような結果を越えて、ベネターの誕生害悪論には、ある人間観や社会観が潜んでいることがわかった。つまり、「完全で依存しない人間像」を前提にし、そうした人間をよしとしている社会であるからこそ、誕生害悪論のようなものが浮かび上がってくるということである。「不完全であるから誰か／何かに依存せざるを得ない」ことを、ベネターは人間にとっての害悪と捉えるところから誕生害悪論のような発想が生まれたのではないかと、私は考える。確かにそれは、苦痛をもたらす場合もある。しかし、いやだからこそ、苦痛を少しでも和らげるために共に考え合うことを通して得られるよろこびもあるのだ。そしてそれを誰よりもよく知っているのは、「不完全で依存しなければならない」障害当事者なのである。

ベネターは、生まれてくることと生まれてこないことを比較して、「生まれてこないほうが良い」と言っている時点で、本論文の主張はそもそもの外れであるという反論もあるだろう。ベネターが言っているのは障害の有無による生の比較のことではない、だから本論文でのベネター批判は当たらないという反論をどう考えるべきなのか。もちろん、障害者たちが「生まれてきて良かった」と言っているからといって、ベネターの主張が崩されるわけではない。そもそも、

誰かが「生まれてきて良かった」と言っていようが、ベネターの主張が間違えているということではない。そうではなく、ベネター的な発想そのものを、とりわけ社会運動を担ってきた障害者たちはしない。そこには何かしらの理由があるはずだ。また、障害者たちが「生まれてきて良かった」と言う背景をも仔細に突き詰める必要がある。本論文以降に残された課題である。

最後に、現代社会において、精神障害があり、人間を信用できないがゆえに人間関係を築くことが難しい人たちが、この反出生主義あるいは誕生害悪論へと流れていってしまうような印象を受ける。ベネターを離れて、みずからの存在の否定、希死念慮が、自分の誕生を否定してしまうのである。私は、そうした人々に対して、語る言葉を持たない。「どうか死なないでください」と念ずるのみである。ベネターは自殺を否定している（Benatar 2006:211-221）が、誕生を否定するわかりやすい言葉を、世界中に流通させてしまったことについては、個人的には非常に憤りを感じている。そして、この社会では、人を裏切ったり出し抜いたり、およそ信用というものを破壊するようなことばかりが日常的に行われている。そのような中で、「人を信用しろ」という言葉は、届くわけもない。世界中を不信の渦に巻き込むようなこの人間社会こそが問われるべきではないのか。生を肯定する言葉を紡ぎだし¹²、この社会が、そして人間が信用に値するものへと変化させていく動きを作り出すための言葉を紡ぎだしていくことこそが、哲学に与えられた一つの使命なのではなかろうか。

※本論文は日本学術振興会科学研究費助成事業（課題番号：21K18346「障害学と倫理学の架橋——障害者の生存から倫理学を構築する基礎的研究」）の助成を受けたものである。

文献

Benatar, David 2000 *The Wrong of Wrongful Life*, *American Philosophical Quarterly*, Vol.37, No.2 (Apr., 2000), 175-183

Benatar, David 2006 *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence*, Oxford University Press（＝小島和男・田村宜義訳 2017 『生まれてこないほうが良かった——存在してしまうことの害悪』，すずさわ書店）

Benatar, David 2007 Book Review: Jonathan Glover, *Choosing Children: The Ethical*

¹² 生を肯定することが、死を否定することではない。生を肯定したいのは、生きている者のバイアスであると言えるが、生まれたからには生を肯定したいというのは、気持ちよく生きるためには必要なことではあるだろう。なぜ「生まれたからには生を肯定したい」と思うかについては、さらなる考究を続けたい。

Dilemmas of Genetic Intervention, Ethical Theory and Moral Practice, Vol.10, No.2
(April 2007), 227-228

Benatar, David 2011 Book Review: Stephen Wilkinson, *Choosing Tomorrow's Children: The Ethics of Selective Reproduction, Social Theory and Practice*, Vol.37, No.3 (July 2011), 524-530

池田法子 2014 「<研究ノート>障害学の理論的展開」, 『京都大学生涯教育フィールド研究』vol.2 (通巻第13号), 85-97

井上輝子 2008 「バックラッシュによる性別二元制イデオロギーの再構築」, 『女性学』15巻, 14-22

岩元綾 2014 『生まれてこないほうがいい命なんてない——「出生前診断」によせて』, かもがわ出版

加藤秀一 2019 「「非同一性問題」再考——「同一」な者とは誰のことか」, 『現代思想』2019年11月号, 136-145, 青土社

Metz, Thaddeus 2014 *Meaning in Life: An Analytic Study*, Oxford University Press

森岡正博 2020 『生まれてこないほうが良かったのか?——生命の哲学へ!』, 筑摩書房

西田江里 2021 『だって、生まれたんだもん——重い障がいがあるけど、みんなと私らしく生きてます。』, ぶどう社

野崎泰伸 2020 「非同一性問題と障害者」, 『現代生命哲学研究』第9号, 27-41

オトナンサー編集部 2021 「更衣室男女一緒...スウェーデンのサウナで見た驚くべき光景と優れた人権意識 「体験してみたい」」,
<https://otonanswer.jp/post/81830/>

佐藤岳詩 2021 『「倫理の問題」とは何か——メタ倫理学から考える』, 光文社 (Kindle版)

玉木幸則 2012 『生まれてきてよかった——てんでバリバラ半生記』, 解放出版社

田村圭一 2003 「倫理学における表出主義とその成否」, 『哲学』39号 (2003年7月), 北海道大学哲学会, 1-18

山口尚 2019 『幸福と人生の意味の哲学』, トランスビュー

Wolbring, Gregor 2008 *The Politics of Ableism, Development* (2008) 51, 252-258